関東大震災の記録

『中井村震災紀念誌』解説

関東大震災の記録

『中井村震災紀念誌』解説

表紙と裏表紙の写真は、大正一四年（一九二五）一月に五所八幡神社境内に建てられた「関東大震災記念碑」

『中井村震災紀年誌』復刊にあたって

大正一二年(一九二三)九月一日に発生した関東大震災における中井村(当時)の被災状況とその復興を詳述した、『中井村震災紀念誌』は、大正一四年(一九二五)二月に刊行されました。その記録は、町の統計数字等に度々使用され、昭和三三年(一九五八)刊行の『中井村誌』には、その抜粋が二〇数ページにわたって掲載されるなど、被害記録として重視されてきました。

平成二八年(二〇一六)に、比奈窪の権守忠義さん宅でその原本が見つかったことから、本書が再び注目されることとなりました。町にはコピーしかなく、それも昭和五〇年(一九七五)頃この原本を借り受けたものであり、原本はこの一冊しか現存していないとみられることから、議会でもその再発刊を求める決議が令和四年(二〇二二)に出されました。

町は、震災から一〇〇年の節目を迎える令和五年(二〇二三)に、その復刻を決め、富士フイルムビジネスイノベーションジャパン京都支社の文化財専門の複製技術によって、蘇らせることができました。

同時に、歴史文書としての本書の価値と現代的意義を精査し、位置づけていただくことが不可欠と考え、あつぎ郷土博物館学芸員で町生物多様性調査会会長の槐真史氏を介して、地域史、災害史の専門家である、東海大学教育開発研究センター教授の馬場弘臣先生に解説をお願い出来たことは望外の喜びです。

解説では村より記念誌編纂を託された松本愛敬氏に着目、合わせて被害状況や救護活動に触れられます。現代語訳は誤読が生じかねないことから、この最良の解説を通して、復刻版をご覧いただく際のよすがにしていただければ幸いです。

令和六年(二〇二四)三月四日

中井町長　戸村　裕司

緒　言

令和六年の(二〇二四)の幕開けは、能登半島の大地震ではじまった。一月一日一六時一〇分に発生した地震は、能登半島の地下一六キロメートルで発生した直下型の地震で、マグニチュードは七・六、最大震度七の直下型地震としては過去最大の地震であるという。奇しくもこの前年、令和五年は大正一二年(一九二三)九月一日に発生した関東大震災からちょうど一〇〇年にあたる節目の年であった。災害列島とも称される日本において、とくに地震の発生は避けることのできない現実であり、どの地域においても来るべき未来、備えるべき未来であるといえよう。それゆえに地震に対する予知の方法、減災のあり方、地震後の救護活動、復興活動など、震災にともなうさまざまな課題については、地震学、地質学などの自然科学はもちろんのこと、経済学や社会学など社会科学、さらには歴史学や考古学などの人文科学の分野等々さまざまな研究分野における総合的な研究が必要である。

そうした中で、とくに文献史学の立場は、震災に関するさまざまな記録を収集して整理し、公開することで後世に伝えていけるようにすることが重要な責務である。

ここに復刊した松本愛敬(よしのり)著『中井村震災紀念誌』は、近年、新たに「再発見」された、中井村における震災の詳細な記録である。松本氏は本書を「総説」「震災編」「救護編」「復興編」の四編に分けて詳述しているが、何よりこの『震災誌』が、震災の翌々年という比較的早い時期に刊行されたことが注目できよう。そこで、この解説にあたっては、とくに震災の実態と震災後の救護活動中心にみていきたい。そこに被災に遭遇しながらも懸命に救護と復興に尽力した中井村の人々の熱意と努力が明らかだからである。原文は旧字体・旧仮名遣いで書かれているが、本文は比較的読みやすく書かれているので、多くの人に読みつがれることを望みたい。

令和六年(二〇二四)三月八日

東海大学教育開発研究センター教授　馬場　弘臣

『中井村震災紀年誌』復刊にあたって　中井町長　戸村　裕司
緒言　東海大学教育開発研究センター教授　馬場　弘臣

目　次

一　『中井村震災紀念誌』と松本愛敬……1
二　『中井村震災紀念誌』にみる関東大震災……4
1　中井村の被害状況について　5
2　中井村の救護活動について　13
あとがき　中井町文化財保護委員会　委員長　関谷　満　16

一　『中井村震災紀念誌』と松本愛敬（よしのり）

『中井村震災紀念誌』は、大正一二年（一九二三）九月一日に発生した関東大震災について、神奈川県足柄上郡中井村（現・中井町）について綴られた書である。著者は松本愛敬（まつもとよしのり）氏で、本書は「概説」「震災編」「救護編」「復興編」の四編からなっている。大正一四年二月一〇日付で中井村役場から発行されたが、本書の「例言」によると、脱稿は震災翌年の一二月一四日となっている。震災からわずか一年三か月後である。

著者である松本愛敬氏は、明治二九年（一八九六）六月一四日に横浜で生まれ、昭和四四年（一九六九）一〇月二三日に中井町において七三歳で没している。横浜市立商業学校（現・横浜市立商業高等学校）を卒業すると、早稲田大学商学部に進学した後、コロンビア大学に留学して修士号を取得したという。それぞれの年代など、詳しい経歴は不明である。また、松本家は現在の中井町の中でも古い家系であり、松本氏の場合は、そもそも中井村に引っ越すというより戻ったといった方が的確と思われるが、それがいつのことかも不明である。しかも松本氏は、若いころには社会主義運動や労働運動に傾倒していたといわれている。事実、関東大震災の二年前、大正一〇年（一九二一）には千住警察署において総督官房特別高等課特別高等係（後の特別高等警察、略称・特高）に、関係者についての取り調べを受けている（山泉進「大杉栄、コミンテルンに遭遇す―（付）李増林聴取書・松本愛敬関係資料」『初期社会主義研究』第15巻第16号）。

晩年の松本夫妻（遺族提供）

それからわずか二年後に震災に遭い、翌大正一三年(一九二四)一二月一四日付けで『中井村震災紀念誌』を書き上げ、同一四年二月一〇日付で刊行されたのであった。本書の詳しい内容は次章でみていくことにして、震災後も松本氏は基本的に中井村に住んでいたと思われるものの、その動向についてはほとんどわからない。ただ、不幸なことにアジア・太平洋戦争の終戦前後の混乱期に失明の悲劇にみまわれたという。しかしながら、昭和二二年(一九四七)四月一日に新制の中井中学校が開校した際には、同年度から三か年間、父母の会(後のＰＴＡ)の会長を務め、昭和二六年四月三〇日から同三〇年四月九日まで村会議員を務めるなど、村の行政や教育に尽力したことがわかっている。その他にも昭和三三年(一九五八)に刊行された『中井村誌』では、「村誌調査委員」を務めるとともに、同誌には『中井村震災紀念誌』の抜粋が収録されている。断片的ながら、松本氏の多様な活動と教養の高さ、そして戦後における公的活動を垣間みることができよう。『中井村震災紀念誌』そのものも中井村役場よりの依頼を受けて執筆したものであるという。

ここではまず、このような関東大震災関係の刊行物について触れておきたい。管見の限りではあるが、震災発生当初には、主に関東戒厳司令部情報部や警視庁保安部建築課、東京市調査会、東京市役所調査課、内務省社会部第一部監督課、中央気象台等々から報告書や被災地図などが刊行され、大阪毎日新聞社、大阪朝日新聞、東京朝日新聞、報知新聞社などの新聞社からは発表された記事の集成や写真帳が、また国際情報社、報知社、講談社、黎明書房、偕行社等々の出版社からも写真集や被災図解などの震災関係図書が出版された。さらに同年末から翌年にかけて、震災の現状や全般を回顧した著書が刊行されはじめた。早い事例として、大正一二年一二月七日発行の長井修吉『大正震災記』(新作社・文行社)や同年一二月二六日発行の水谷巽『東京大震災遭難記』(黎明書房)、同月三一日付の山田延彌『大正震災誌』(大正震災誌刊行会)などが確認できる。翌大正一三年になるとさらにこうした書籍が増え、小説家の田山花袋も四月二〇日付で『東京震災記』(博文閣)を出版している。そして大正一四年(一九二五)から一五年にか

けて、官公庁や東京府・東京市から、震災に関する記録(震災誌)が続々と刊行されていった。大正一四年の刊行物として、農務省『関東地震調査報告』第1(三月二六日刊行、以下月日は刊行日)、震災予防調査会編『震災予防調査報告　(甲)(乙)』(三月三一日)、東京市役所『東京大正震災誌』(四月三日)、東京府『東京府大正震災誌』(五月五日)、商工省『関東地震調査報告』第2(七月三一日)、警視庁『大正大震火災誌』(七月三一日)などがあり、大正一五年(一九二六)には内務省社会局『大正震災誌　上下』(二月二八日)、東京市役所『東京震災録』前輯・中輯・後輯(1)・後輯(2)・別輯・地図及写真帖(三月三一日)、震災予防調査会編『震災予防調査会報告　第百号(丙)上下(丁)(戊)』が刊行された。また、これらとは別に社団法人土木学会から『大正十二年関東大震災震害調査報告』第一巻〜第三巻(八月三〇日)が刊行されている。いずれも現在においても関東大震災を研究する上で必読の書である。

政府の官公庁の中では、とくに内務省社会局と中央気象台が重要である。関東大震災では各地の被害に対する詳細なデータが得られているが、その中心となったのが内務省社会局で、市町村に対して調査を依頼し、情報を収集したという。また、中央気象台は気象庁の前身にあたる組織で、気象庁の任務がそうであるように地震関連の予報や警報などを管掌した。さらに、震災予防調査会は、文部省所轄の研究機関で、明治二四年(一八九一)の濃尾地震を契機として作られた。地震予知の方法や減災に関する研究を行っていたが、関東大震災を機に東京帝国大学地震研究所(現・東京大学地震研究所)と震災予防評議会(現・社団法人震災予防協会)に分かれた。震災予防調査会では府県を通じて被災データを収集したというが、このように『震災誌』や調査報告において死者や全半壊・全半焼家屋などの数値に違いがみられるのは、調査方法や機関の相違によるものであろう。

神奈川県における震災の記録としては、まず最初に昭和二年(一九二七)九月三〇日刊行の『神奈川県震災誌』があげられる。ただ、それより以前、東京府や東京市に追従するかのように、大正一四年(一九二五)ころから市町村レベルで『震災誌』を刊行する動きが盛んになってきたようである。そうした中でも同年二月一〇日刊行の『中井村震災

紀年誌』は早い事例であろう。それ以前にも、例えば大正一三年九月に刊行された東京府荏原郡大井町の『大震災記念誌―大井町―』（『品川区史』続資料編（二）、一九七六年発行に収録）の事例があり、これからも新たな『震災誌』が「発見」される可能性は高い。しかしながら『中井村震災紀年誌』以降、大正一四年に刊行された『震災誌』として、五月二〇日刊行の『赤坂区震災誌』（東京市赤坂区役所）、九月一日刊行の淵江源治著『八王子市大正震災誌』（八王子市役所）、一二月二三日刊行の『埼玉県北足立郡大正震災誌』（埼玉県足立郡役所）がある。その後も昭和二年九月三〇日刊行の長坂村太郎『神奈川県足柄上郡川村震災記念誌』（川村役場、以下『川村震災記念誌』と略記）、昭和七年五月二七日刊行の『横須賀市震災誌　附復興誌』（横須賀市震災誌刊行会）などが続いている。中でも注目したいのが同じ足柄上郡の『川村震災記念誌』である。前述したとおり、『中井村震災紀念誌』が総説・震災編・救護編・復興編の四編からなっているのに対し、『川村震災記念誌』は一総説・二被害に就て・三復興に就て、四復興に干与（かんよ）せし氏名の四章からなっており、構成的にもよく似ている。どちらも「総説」からはじまるが、地震の多い日本では、震災に対する書籍が多数出版されているので、そうしたものを参考にしてまず震災についての概説が書かれたのであろう。著者の長坂村太郎（邨太郎とも書く）は、川村高等尋常小学校校長を務めるかたわらで郷土史家として『川村城址記』（松田町、一九三二年）や『歴史上にみたる河村氏』（河村尋常小学校国史研究部並山北町青年団、一九三七）などを上梓（じょうし）していた。いずれにしても、『中井村震災紀年誌』がこうした『震災誌』の嚆矢（こうし）の一つとなったのは間違いないであろう。

二　『中井村震災紀念誌』にみる関東大震災

ここで改めて関東大震災について、簡単にまとめておくことにしよう(北原糸子他編『日本歴史災害事典』吉川弘文館、二〇一二年)。本震の発生は、大正一二年(一九二三)九月一日一一時五八分三二秒で、相模トラフを震源とした海溝型地震であるが、震央は神奈川県西部の松田付近で、深さが二五キロメートルと推定されている。マグニチュードは従来M七・九とされていたが、近年の研究ではM八・一±〇・二となっている。震源地の神奈川県から千葉県南部を中心に、広範囲にわたって震度七や六強の地震が記録されたという。この地震による死者は、行方不明者を含め、推定一〇万五三八五人と推定されている。また、相模湾から伊豆半島にかけて高さ五メートルを超える津波が、早いところでは地震発生後数分以内に陸地に到達した。鎌倉町の死者四九七名のうち九一名は、この津波による流死者であったという。さらに房総半島から三浦半島・伊豆半島の付け根にかけて最大で二メートル近くの隆起があったことも知られている。地震の規模も死者や全壊・焼失家屋の数にしても明治以降最大の地震であった。

1　中井村の被害状況について

『中井村震災紀年誌』の最大の特徴は、「震災編」の「一、中井村各字(あざ)の災害概況」であろう(34頁)。関東大震災の『震災誌』や被災記録は多数残っているが、字ごとの被災状況について書かれたものは極めて珍しい。字は明治初年の市町村制の施行によって、江戸時代の「村」を自然集落として区別するために、市町村の区画の下に位置づけられた地名である。また、字には大字(おおあざ)と小字(こあざ)があり、大字はおおむねこの江戸時代の「村」を表し、小字はその下の集落を示す。字は普通、この小字の意味で使われることが多いものの、大字の意味で使われることもある。本書では大字の意味で使われており、井ノ口にはこの小字ごとの被害が書き上げられている(47頁)。また、本書では字、大字の意味で部落(ぶらく)という呼称も使われている。現在では被差別集落を示すことが多くなったが、本来は大字と同じく、こう

表1．足柄上郡と神奈川県全域および近隣主要市町の被害状況

町村名	現自治体	人的被害			家屋の被害				
		人口 (人)	死者 (人)	死亡率 (%)	世帯数 (戸)	全壊 (戸)	焼失 (戸)	全壊率 (%)	焼失率 (%)
中井村	中井町	5,321	24	0.45	852	213	0	25.00	0.00
松田町	松田町	3,626	10	0.28	737	302	1	40.98	0.14
寄村		1,823	5	0.27	341	5	0	1.47	0.00
上中村	大井町	1,247	3	0.24	209	3	0	1.44	0.00
山田村		938	7	0.75	157	7	0	4.46	0.00
曽我村		2,941	41	1.39	482	385	2	79.88	0.41
金田村		1,932	9	0.47	355	112	1	31.55	0.28
吉田島村	開成町	1,288	8	0.62	260	2	1	0.77	0.38
酒田村		1,445	4	0.28	276	84	1	30.43	0.36
岡本村	南足柄市	3,340	28	0.84	580	248	2	42.76	0.34
南足柄村		3,359	3	0.09	641	60	0	9.36	0.00
福沢村		2,495	4	0.16	476	75	0	15.76	0.00
北足柄村	南足柄市	1,851	4	0.22	341	53	0	15.54	0.00
川村	山北町	6,462	20	0.31	1,283	137	0	10.68	0.00
共和村		778	11	1.41	133	15	0	11.28	0.00
清水村		1,852	7	0.38	334	9	0	2.69	0.00
神縄村		426	1	0.23	78	2	0	2.56	0.00
三保村		2,166	4	0.18	471	7	0	1.49	0.00
上秦野村	秦野市	1,976	4	0.20	345	71	0	20.58	0.00
桜井村	小田原市	1,445	4	0.28	276	84	1	30.43	0.36
足柄上郡合計		46,711	201	0.43	8,627	1,874	9	21.72	0.10
横浜市	横浜市	403,586	26,623	6.60	93,986	28,169	62,608	29.97	66.61
小田原町	小田原市	22,477	280	1.25	4,779	2,915	3,384	61.00	70.81
秦野町	秦野市	10,075	21	0.21	2,053	556	271	27.08	13.20
大磯町	大磯町	8,572	32	0.37	1,729	181	0	10.47	0.00
平塚町	平塚市	11,367	266	2.34	2,424	1,313	2	54.17	0.08
厚木町	厚木市	4,498	27	0.60	983	24	0	2.44	0.00
伊勢原町	伊勢原市	3,860	13	0.34	776	296	3	38.14	0.39
神奈川県全域		1,379,000	29,614	2.15	274,300	46,719	62,608	17.03	22.82
神奈川県郡部合計		861,900	7,488	0.87	157,450	15,158	2,933	9.63	1.86

注）諸井孝文・武村真之「関東地震（1923年９月１日）による被害要因別死者数推定」『日本地震工学会論文集』第４巻第４号、2004年に収録の付表を基本とし、中井村については、松本愛敬『中井村震災紀念誌』（中井村役場、1925）、川村については、長坂村太郎『神奈川県足柄上郡川村震災記念誌』(川村役場、1927)を照合した。また、神奈川県全域と郡部の合計は『神奈川県震災誌』(神奈川県、1927年)から作成した。神奈川県全域と郡部合計の死者には行方不明分が含まれている。

した江戸時代の「村」を示す呼称で、地方では今でも一般的に使われることが多い。本書に字もしくは部落として出てくる比奈窪、松本、雑色、鴨沢、古怒田、半分形、田中、遠藤、北田、久所、藤沢、岩倉、境、境別所、井ノ口の一五の集落はすべて江戸時代の「村」であった。明治二二年（一八八九）に市制・町村制が施行されると、それ

まで比奈窪村、松本村、雑色村、鴨沢村、古怒田村、半分形村、田中村、遠藤村、北田村、久所村、藤沢村、岩倉村、境村、境別所村と称していた一四か村に井ノ口村と小竹村(現・伊勢原市)の飛地(とびち)が合併して中村となり、井ノ口村は単独でそのまま井ノ口村となった。その後、明治四一年(一九〇八)に中村と井ノ口村が合併して中井村となり、昭和三三年(一九五八)に中井町となったのであった。近現代の市町村は、このように江戸時代の「村」が合併を繰り返して形成されていくのである。現在ではそれぞれを構成する大字、字、部落は地区とも呼ばれているので、今後は基本的に字(地区)と称することにしたい。

そこでまず、中井村の字(地区)ごとの被災状況をみていく前に、中井村全体の被害状況を当時の足柄上郡の町村と比較するために作成したのが表1である。参考までに当時の近隣の主要町村や神奈川県全体および神奈川県の郡部の合計も計上してみた。足柄上郡の被害状況については、すでに桐生海生氏の研究がある(鈴木晶他編『神奈川の関東大震災―100年後の視点』第1部第8章「足柄上郡の関東大震災」えにし書房、二〇二三年)。桐生氏はまず、震災時に足柄上郡であった町村で、現在の南足柄市、山北町、開成町、松田町、大井町、中井町に含まれていた町村における当時の被害状況についてまとめている。また、各地の震災記念碑をはじめとする遺構について広く紹介されており、中井町の五所八幡神社境内にある大正一四年(一九二五)一月建立の震災記念碑も紹介されている。

表1は、諸井孝文・武村真之「関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数推定」『日本地震工学会論文集』第4巻第4号(二〇〇四年)に収録された付表をもとに作成したものである。死者数は、先に紹介した『震災予防調査会報告　第百号(甲)』所収の松澤武雄「木造建築

五所八幡神社境内の震災記念碑

物ニヨル震害分布調査報告」に収録された付表の数値を採用している。中井村の死者については『中井村震災紀年誌』では二四名となっており、松澤氏の付表も同じであるが、中井村震災記念碑の碑文には二五名とある(写真参照)。また、内務省社会局の報告では二八名となっている。松澤氏も報告書で述べているように、とくに都市部では被害の正確な数値を把握すること自体が難しく、情報の収集法や提供先によっても変わってくる。とはいえ、歴史的事象はなるべくそれが起きた時期に記録されたもの、現場に近いほど正確な情報を知ることが可能で、時期が遅くなればなるほど記憶が曖昧になったり、不確実な要素が紛れ込むことが多くなってくる。その意味でも震災の翌年に執筆された『中井村震災紀年誌』は歴史的価値が高いのである。

この死者数二四名(〇・四五%)は、足柄上郡の中では曽我村の四一名(一・三九%)、岡本村の二八名(〇・八四%)についで多い。また、焼失家屋そのものは少ないので、全壊家屋についてみていくと、中井村の二一三戸(二五・〇〇%)は、曽我村の三八五戸(七九・八八%)、松田村の三〇二戸(四〇・九八%)、岡本村の二四八戸(四二・七六%)についで多い。足柄上郡ではとにかく曽我村の被害が際立っているようである。中井村の被害は、足柄上郡全体で比較すると死亡率も全壊率も平均より大きい。足柄上郡の中で中井村は、川村についで人口数や世帯数が多いにも関わらずである。また、神奈川全域で比較しても中井村の被害率は大きく、郡部だけで比べるとなおその差は大きい。数値だけの比較からみても中井村はそれなりの被害を受けたことがわかるであろう。その具体的な内容を明らかにしたのが『中井村震災紀年誌』なのである。ちなみに、人口数・世帯数が足柄上郡の中で一番目と二番目となる川村と中井村が『震災記念誌』を著したのは興味深いことである。

足柄上郡は、神奈川県西部の内陸部にあって山間の村を含めて畑勝ちの村が多い。震災当時における中井村の耕地は、畑が七〇五町六反四畝七歩で、田は九七町一反二畝一一歩となっており、圧倒的に畑方の割合が高い(57頁)。そのため米作とのしての生産力は低く、畑では煙草が第一の農産物で、その収穫額は米や養蚕、大小小麦などの生産

部を合算したものよりも大きかったという(58頁)。こうした耕地を含め、崩壊、亀裂、埋没などの土地に対する被害はもちろんのこと、用水路や堤防の破壊にともなう損害も大きかったという(57頁)。農村部の被害はいずれも同様であろう。『中井村震災紀年誌』には、住宅の被害の他、土蔵や倉庫の被害についても書き上げられている。また、中村尋常高等小学校、井ノ口尋常高等小学校などの教育機関に、役場、隔離病院などの公的機関、神社仏閣、名所旧跡、道路や橋梁などの交通路や交通運輸、水道、産業、金融などあらゆる被害を書き上げていて貴重である。この点は、『川村震災記念誌』も同様である。ただし、『中井村震災紀年誌』が字ごとの被害状況を記述しているところに特徴があるとして、『川村震災記念誌』は、「震災日記」(九月一日～一〇月二九日)と「川村青年団日記」(九月一日～二五日)を収録しているのが大きな特徴であった。そのために地震発生時の状況は

図1．中井町の字(地区)と周辺地域　　内が中井村の字(地区)　　馬場弘臣・目七哲史作成

もちろんのこと、その後次第に明らかになってくる被害状況や救護、復旧のありさまなどを日ごとに追うことができる。

近隣地域、とくに町場についてみていくと、小田原町―死者二八〇名(一・二五%)、全壊家屋三三八四戸(六一・〇〇%)、焼失家屋三三八四戸(七〇・八一%)、平塚町―死者二六六名(二・三四%)、全壊家屋一三一三戸(五四・一七%)が目をひく。壊滅的な被害を受けた横浜市はなおさらで、それが神奈川県全域の被害を大きく引き上げている。

関東大震災は東京市と横浜市に被害が集中した。横浜市の人口は四〇万三五八六人で、死者数二万六二二三人、死者率は六・六〇%、世帯数は九万三九八六戸で、全壊家屋二万八一六九戸、全壊率二九・九七%、焼失家屋六万二六〇八戸、焼失率六六・六一%となっている。これに対して東京市の人口は二〇七万九〇九四人で、死者数六万八六六〇人、死者率三・三〇%、世帯数は四五万二四〇二戸で、全壊家屋三万五三五〇戸、全壊率七・八一%、焼失家屋三〇万九二四人、焼失率六六・五二%であった。いずれも桁違いである。人口では東京市が横浜市の人口で五倍以上、世帯数で四・八倍と大きな違いがあるが、死者率は横浜市の方が二倍となっており、焼失家屋率はほぼ変わらないものの、全壊家屋率も横浜市が三・八倍である。被害の割合からすれば、東京市よりも横浜市の方が大きかったともいえよう。いずれにしても被害の大きさから、関東大震災といえば東京市と横浜市が注目されるのは当然であった。まさに都市機能が麻痺するほどの大災害だったのである。住宅が密集する都市部―町場で被害が大きくなりやすく、注目されやすいからこそ、中井村や川村のような純粋な農村部における『震災誌』に目を向けて分析していくことが重要であろう。中井村ではさらに字(地区)ごとの被害状況が判明するからなおさらである。具体的に検討していこう。

表2は、字(地区)ごとの被害状況をまとめたものである(34頁)。それぞれの字(地区)の位置については前ページの図1を参照されたい。『中井村震災紀年誌』には残念ながら各字(地区)の人口や世帯数が書かれていないので、死者率や全壊率などは出せない。また、字(地区)の耕作規模も全部はわからないので、ここでは参考までに江戸時代、天保(てんぽう)

五年(一八三四)に幕府が編纂した「郷帳」における各字(地区)＝旧村の石高(村高)をあげてみた。石高は田畑・屋敷地の生産高を米の生産量になぞらえたものである。そのために米の生産高が高いほど村高は大きくなる。村高の全国平均は約四〇〇石といわれており、そうした村が天保五年時点で約七万四〇〇〇余りあったという。

大磯丘陵の南西部にあって畑勝ちの中井村は、前述の通り米の生産量が低いために、総じて村高も低くなりがちであった。表2で各字(地区)の江戸時代の村高を確認してみると、四〇〇石を超えているのは井ノ口村の六九一石余と松本村の四四三石余の二か村だけで、二〇〇石台が二か村、一〇〇石台が一〇か村、古怒田にいたっては六三石であった。その上で、表2をみると、死者の数がもっとも多いのが松本の七名で、境の五名、北田の四名と続き、比奈窪、雑色、古怒田、半分形、遠藤、久所、藤沢の六字(地区)は死者ゼロであった。合計は二四名となり、比較的人的被害は少ないようであるが、先にも述べたように中井村全体の死亡率〇・四五%は、足柄上郡では平均より若干高くなっている。なお、死者の人名については、『川村震災記念誌』が全人名を書き上げているのに対し、『中井村震災紀年誌』では、字(地区)によっては人数のみしか書き上げてない場合があった。

表2．中井村の地区(字)別被害状況

字(地区)	人的被害		家屋被害			損害額(円)	村高(1834年)
	死者数(人)	重傷者数(人)	全壊(戸)	半壊(戸)	合計(戸)		
比奈窪	0	0	15	11	26	5,103	178石余
松　本	7	0	13	30	43	19,755	443石余
雑　色	0	0	2	9	11	1,299	138石余
鴨　沢	1	1	8	25	33	4,356	130石余
古怒田	0	1	1	20	21	5,240	63石余
半分形	0	0	3	11	14	3,530	191石余
田　中	2	6	10	19	29	8,420	180石余
遠　藤	0	0	12	23	35	7,150	174石余
北　田	4	2	15	17	32	6,563	178石余
久　所	0	1	4	0	4	2,040	166石余
藤　沢	0	1	1	10	11	2,555	212石余
岩　倉	1	0	4	9	13	6,995	134石余
境	5	1	53	29	82	32,929	268石余
境別所	1	2	17	18	35	16,001	142石余
井ノ口	3	6	55	92	147	37,643	691石余
計	**24**	**21**	**213**	**323**	**536**	**159,579**	

注）松本愛敬『中井村震災紀念誌』(中井村役場、1925)より作成。

次に家屋の被害については、住家・倉庫・非住家について全壊と半壊が書き上げてある。ここでは住家の被害だけの数値をあげた。住家の被害がもっとも大きかったのが井ノ口で全壊住家五六戸、住家半壊九七戸となっている。井ノ口ではさらに家屋の被害については、下井ノ口、北窪、宮、砂口、遠藤原、五分一の六つの小字ごとの統計もとっている。この中でもっとも被害が大きい小字は遠藤原で、宮がこれに続いた。『中井村震災紀年誌』で松本氏自身が述べているように、「井ノ口は、字が大きいので、被害の数字も亦大きい」のであった。

これに次ぐのが境で、全壊五三戸、半壊三五戸となっている。ただし、字(地区)の規模の違いを考慮してのことであろうか、松本氏は境が一番大きな影響を受けていて、例えていえば被害の「横綱格」であるという。また、死者一名、重傷者二名、全壊住家一七戸、半壊住家二九戸の境別所も「境に劣らぬ被害」を受けたと述べている。「大関」にあたる字(地区)はないが、死者四名、重傷者二名、全壊住家一七戸、半壊住家三二戸の北田が「関脇」で、死者二名、重傷者六名、全壊住家一〇戸、半壊住家田中が「前頭」の筆頭か「小結」にあたるというのである。これとは逆に、死者・重傷者ゼロで、全壊住家二戸、半壊住家九戸の雑色と死者ゼロ、全壊住家四戸、半壊住家ゼロの久所は、ともに「被害僅少の大関」と表現している。いずれにしても中井村全体の全壊率は、足柄上郡の中でも平均以上であり、神奈川県全域の平均よりかなり高かったのである。

これ以外にも、裏山の崖崩れのために三名が亡くなった赤坂氏をはじめ、合計七名を数えた松本の死者は、全村の死者の三割九分強を占めていた。松本では、全壊住家一三戸、半壊住家三〇戸の他、倉庫や非住家の被害も大きかったことから境、井ノ口に次ぐ大被害を受けたとある。また、比奈窪では地震による崩壊、埋没、亀裂が多く、とくに耕地の被害が多かったこと、鴨沢では山林、田畑の被害が大きいことなど、各字(地区)の土地の被害などにも触れている。こうした各字(地区)の被害状況の違いは、損害額によく表れているので、これも表2に加えておいた。

ここでは、『中井村震災紀年誌』の特徴である各字(地区)ごとの被害状況に注目して検討してみた。「災害編」には、

先にも述べたようにあらゆる角度から中井村の被害について詳述されているので、あわせて読んでいただきたいところである。また、「総説」の中の記述であるが、「一月十五日の強震」として、九月一日以降の余震の中で最大であったという一月一五日の余震、いわゆる「丹沢地震」について詳述されていることに注目しておきたい。

二　中井村の救護活動について

前章では、震災による死者や崩壊・焼失家屋の地域比較という視点で中井村の被害を足柄上郡や震災全般に位置づけた上で、『中井村震災紀年誌』の特徴である各字(地区)ごとの被害状況についてみてきた。本章では、「救護編」(八五頁)をもとに、震災後の中井村の救護活動についてみていきたい。ただし、「救護編」の前半は、皇室からの恩顧・恩賜、政府の救援・治安策、そして諸外国の援助となっており、他書でも著述されていることなので割愛し、ここでは「村の施設と活動」の章(103頁)についてみていくことにしよう。

まず注目したいのは、九月四日に開かれた中井村会の結果「中井村復興協議会」が結成されたことである。これは村長(小沼吉治)を会長として、村会議員、区長、学識経験者を「議員」とするもので、「物価の調整、食糧問題の解決、賃金の制定、物資の配給、復興への方策などを審議し、解決し、村の危機を救護し、復興を促進する」ことを目的とする組織であった。実際、『中井村震災紀年誌』には、食糧問題、鳶職などの賃金の制定、物資の配給、練乳の供与、医薬、小作問題の解決などの決定事項が具体的に列挙されている。さらに、この「中井村復興協議会」と歩を一にして職務に邁進する役場職員のようすや構成メンバーであった議員・区長の氏名も列挙されている(108頁)。

次に救護に奮闘した村内の諸団体として、村農会、在郷軍人、青年団、処女会報徳社、宗教団体、警察の具体的な活動について詳述されている。この中でも注目したいのが報徳社である。報徳社は、二宮金次郎(尊徳・一七八七〜

一八五六）の報徳思想を実践する結社である。金次郎は、領足柄上郡栢山村（現・小田原市）の出身で、領主である小田原藩や烏山藩などの藩の再建から、村や町、さらには武士から農民まで、その要請に応じてそれぞれの再建を進めた人物であった。農政家と称されることが多いが、今でいえば敏腕のコンサルタントのような存在であったといえよう。報徳社は天保一〇年（一八三九）に小田原で結成された小田原仕法組合が淵源とされており、互助金融や社会事業を通じて家や村、地域の立て直しをめざした。幕末から明治期にかけて金次郎の弟子や孫弟子たちによって報徳思想が広められるとともに、明治政府による地方改良運動の重要な柱として位置づけられたこともあって、報徳社の結成が全国的な広がりをみせていた。中井村を構成する字（地区）、すなわち江戸時代の村には小田原藩領に含まれる村もあったことから、報徳仕法については江戸時代からなじみがあったと思われる。とはいえ、すべての市町村に報徳社が結成されたわけではなく、中井村では比奈窪、松本、雑色、鴨沢、境、久所、井ノ口の七か所に報徳結社があって、報徳仕法にもとづく実践活動として、食料品の寄贈や労務などによって村に奉仕したり、罹災者を訪れて慰問、教化に努め、思想の激変を防ぐなど、隠れた方面に多大な力を尽くしたという。

その他にも、例えば警察関係では、松田警察署との連絡が途絶えるなど震災後の不安定な社会状況下で、比奈窪駐在所と井ノ口駐在所とで連絡を取りながら、流言飛語や緊急勅令の伝達による治安維持、震災被害に対する村内の調査などにあたったという。また、国有鉄道路修復のため、多大の人員が必要あるということを聞いた一部の青年たちが、震災直後に二宮や国府津方面に出勤して修繕工事にあたり、その給金として政府から一人一日につき二円五〇銭が支給されたところ、この総額が一三〇〇円（もしくは一四〇〇円）にもなったという。『中井村震災紀年誌』では、青年ならびに本村は、臨時の収入を得て、震災後の苦境を切り抜け、大いに助かったなったとある。個人的に使うだけでなく、青年団や村のために使われたのである。

さらに本書で松本氏は、「一本の矢と三本の矢」という戦国大名毛利元就の故事を引きつつ、伍長の金子新次郎の

発案で、家を失った一〇家族でバラック小屋を建て、それぞれの仕事で得た金のすべてを共有として帳簿につけ、必要に応じて支出し、共存共栄の実をあげて、最後に解散するときにこれらの資金を精算することにしたという事例をあげている。これには誰も異存はなく、この「一大家族」は一つの「組」として、諸星一太郎の妻女を「組合葬」として手厚く葬り、昼は懸命に働き、夜は夜警をして万が一の事態に備え、一〇日間の共同生活の経てそれぞれの家を再建するなど、少ない経費で助け合いながら復興の第一歩を歩み出したという。

なお、「復興編」は震災から一年と約三か月を経たくらいの時期に書かれたものであったから、まだまだ復興の途中経過を示すに過ぎないが、高等小学校などの教育機関、各字(区)、産業、金融の復興状況について簡潔にまとめてある。それでもこの「復興編」の序文には、休むこともなく、奮闘努力した結果、すべては着々として成果を上げ、「一週(周)年を迎えた九月一日には、已(すで)に九分の美しい実を結んだ」とある。しかしながら、我々の理想は、単なる復興よって満足するのではなく、より以上に充実した堅実な「大中井村」の建設あるのだという。松本氏の言は、当時の村人たちの率直な意見であり、悲痛なる願いを代弁するものであろう。

このように松本愛敬氏の手による『中井村震災紀年誌』は、報告書のように淡々と震災の事実を記録したものではなく、また論文のように堅い文章で綴られたものでもない。その学識の高さの反面、被災者に向ける視線はあくまでも誠実であたたかい。それでは本書が『記念誌』ではなく『紀念誌』であったのはなぜか。「紀念」は「記念」の別字ともいい、誤用だともいわれている。ただ「紀」には、筋道をたてて書くという意味があり、歴史書の中でも帝王の年譜を「紀(本紀)」という。松本氏は「記念」でも「祈念」でもなく、あえて「紀念」を選んだのではないか。そこに震災を綴ることに対する松本氏の矜持(きょうじ)のようなものを感じるのである。緒言でも述べたが、本書は旧字体・旧仮名遣いで書かれているが、その筆致は柔らかく、文章も比較的読みやすく書かれている。それだけに改めて本書が多くの人に読まれ、読みつがれていくことを願いたい。

あとがき

今回『中井村震災紀念誌』復刻版の発刊にあたり、東海大学教育開発研究センターの馬場弘臣教授に『中井村震災紀念誌』解説を執筆して頂きました。本解説では、冒頭に紀念誌の編集者である松本愛敬氏の経歴が書かれています。氏の経歴を見ると当時の村長であった小沼吉治村長が松本愛敬氏に記念誌の編集を依頼した事は英断であった事が窺われます。

本書は百年前の旧字体・旧仮名遣いではありますが、比較的読みやすく書かれています。しかし、書かれた当時の社会情勢や生活環境、近隣町村の状況などを現代の我々が推測し本書を読み理解するには難しいものがあり、本解説は本書を読む上で大きな助けになります。

また、本解説では詳細に集計された紀念誌のデータを客観的に整理し、紀念誌では未だ記載されていない近隣町村のデータとの比較も行っています。その結果、中井村の被害が近隣の町村より少し大きかった事が判り、被害状況には、どの様な特色があるかといった解析がされています。

その他救護活動に関して中井村がどの様に対応したか、そして各種団体の活動が効果的であった事や、流言飛語への対応をどの様にしたかも解説されています。

紀念誌刊行当時、復興に関しては未だ途上ではあるものの単なる復興ではなく、より以上に充実し堅実な「大中井村」を建設すると言う松本愛敬氏や村民の想いを推し量り、復興とはどうあるべきかを示唆しています。そして、最後に本書を『記念誌』ではなく、『紀念誌』とした松本氏の想いも推し量っています。

以上の様に『中井村震災紀念誌』を読む前に、まず本解説を読んで頂くことをお勧めします。本解説は『紀念誌』に対する理解を深める上で大きな助けになるものと期待します。

令和六年（二〇二四）三月九日

中井町文化財保護委員会　委員長　関谷　満

関東大震災の記録
『中井村震災紀念誌』解説

令和六年(二〇二四)三月三一日発行

編著者　馬場弘臣

発行者　戸村裕司

発行　神奈川県足柄上郡中井町役場

発行所　野の花出版社
(合同会社オフィス野の花内)
〒二四三―〇〇三一
神奈川県厚木市戸室二―一〇―四七
TEL　〇四六―二二六―八四六四